

論文執筆支援

—対面と遠隔を組み合わせたリアルタイム型の少人数・個別学習指導—

野崎 浩成*

1. はじめに

2020年度は、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19とする）への対応が求められるようになった。それに伴い、各大学は、インターネットなどのICTを活用した遠隔授業を行うようになった。文科省（2020）によると、2020年5月時点では、約9割の大学等が全面的に遠隔授業を実施していたが、同年7月1日時点では、約6割が対面・遠隔授業を併用して授業を実施するようになったこと、さらに、対面授業のみの大学等、遠隔授業のみの大学等は、いずれも約2割程度であると報告されている。

このような背景のもとで、本稿では、2020年度に筆者の研究室で行われた「論文執筆支援」について述べる。具体的には、筆者の研究室に所属する学部4年生、大学院生、研究生（留学生）を対象に実施した「対面と遠隔を組み合わせたリアルタイム型の少人数・個別学習指導」について述べる。

2. 先行研究と本稿の目的

2. 1. 本稿の目的

本章では、これまでに筆者が取り組んできた先行研究を概説する。これにより、COVID-19が流行する以前に（2019年度以前に）、「対面形式」のみで論文執筆指導を行ってきた方法について述べる。次に、第3章では、2020年度に行った「対面と遠隔を組み合わせたリアルタイム型の少人数・個別学習指導」について報告する。そして、2019年度以前の「対面形式」と、2020年度の「対面と遠隔の併用・リアルタイム形式」、この2者を概観することで、「対面と遠隔を組み合わせたリアルタイム型の少人数・個別学習指導」について考察するのが本稿の目的となる。そして、最後に、教育ガバナンス第1期生で、筆者の研究室に所属する4年生の卒論タイトル一覧を紹介する。

2. 2. 先行研究の概説（2019年度以前の対面形式について）

COVID-19が流行する以前に（2019年度以前に）、筆者が「対面形式」で論文執筆指導を行ってきた研究（野崎（印刷中））について概説する。具体的には、次の通りである。

野崎（印刷中）では、愛知教育大学情報科学コースにおける教育実践事例を報告している。2012年度、筆者の研究室では、3年生5名、4年生6名、大学院生3名、研究生（外国人留学生）3名、合計17名を対象に、卒論・修論指導を行った。週1回のペースで、1コマ90分間、年間で延べ30回、対面によるゼミナール形式で実施された。学生は3回の授業のうち1回のペースでゼミ発表をする。年間で一人当たり10回発表することになる。4年生は前期終了後に、複数の研究室と合同で、卒業研究中間発表会を行う。さらに、卒業論文提出後に、クラス全体で卒業研究発表会を実施する。発表会では、すべての学生が発表10分、質疑4分でプレゼンター

*愛知教育大学 教育ガバナンス講座

ションを行う。卒業研究の執筆指導は、これらのゼミ発表とは別に、学生一人一人に対して指導教員が個別に実施する。

一方、大学院の修士研究については、クラス全体で行う合同報告会は、月に1回のペースで、大学院担当教員全員が出席して実施される。修士研究の指導は、研究室ごとに個別に行われている。筆者の研究室では週1～2回のペースで定期的に行った。

論文執筆支援については、テンプレート（定型書式）という特定の規範（=型）を活用することで、「書くこと」の指導を行った（野崎 印刷中）。具体的には、テンプレート（定型書式）の配信と共有を行い、指導の際、特定の規範（=型）を教える。学生はテンプレートに従い、卒論・修論を書き進めて行く。さらに、よい原稿の例示（先輩が作成したお手本となる良い事例）を参考にする。さらに、個別指導（添削結果の返却と指導）を行う。使用するテンプレートは筆者が作成したものであり、日本語で書かれた簡易版・詳細版のほか、留学生向けの英語版テンプレートがある。付録には、紙面の都合上、簡易版のテンプレートのみを掲載した。

さらに、moodleなどのLMS（Learning Management System）を活用することで、卒業研究・修士研究のスケジュール管理、ゼミ発表の予定日や原稿提出締切日の確認などが学習者自身で出来るようにしたことで、自己調整型の学習ができるように配慮した。

3. 対面と遠隔を組み合わせたリアルタイム型の少人数・個別学習指導

本章では、2020年度、筆者の研究室で行った「論文執筆支援」について紹介する。具体的には、Microsoft Teams（ビデオ会議機能）とmoodle（本学では通称「まなびネット」と呼ばれているLMS）を用いて、対面と遠隔を組み合わせたリアルタイム型の少人数・個別学習指導を行った。

3. 1. 対象者

筆者の研究室に所属する4年生6名、研究生（留学生）1名である。さらに、筆者の研究室から大学院博士課程に進んだ留学生1名である。よって、対象者は、4年生、大学院生、留学生を含め、全体で8名となる。

3. 2. 課題

学部4年生6名の課題は、卒論本文の執筆、中間発表会での発表、卒論発表会での発表および発表要旨の作成である。また、大学院生は博士論文の執筆であり、研究生は修論の研究計画の作成、および、修士論文執筆に向けての事前研究を行うことが課題となる。

3. 3. 指導方略

本稿での指導方略は、「テンプレート」を活用した研究指導、「少人数・個別学習指導」、「ゼミ発表」であり、これら3点は、野崎（印刷中）と同一である。一方で、野崎（印刷中）との相違点は、2019年以前（野崎（印刷中））は「対面のみ」であったが、2020年度（本稿）は「対面」と「遠隔」を組み合わせた「リアルタイム型」の学習である。

3. 4. 手続き

3. 4. 1. 2020年度前期

2020年度「前期」は学部4年生6名を対象に、3.3で述べた「指導方略」3点に基づいて行われた。週1回のペースで、1コマ90分間、「遠隔」のみであり、Microsoft Teamsとmoodleを用いて、ゼミナール形式で行った。各学生は、2-3週間に1回の割合でゼミ発表を行った。ゼミ発表の方法は次の通りである。

①発表者は、あらかじめ、発表用の資料を、moodleに、アップしておく。

- ②発表は一人あたり、発表 20 分 + 質疑 15 分 = 合計 35 分。多少の時間延長は可であるが、最大で 45 分間まで。
- ③司会者はタイムキーパーも兼ねており、最大で 45 分経過したら、必ず次の発表に進む。
- ④司会者は輪番で行う。

3. 4. 2. 2020 年度卒論中間発表会

卒論中間発表会は 10 月 28 日（水）午後、教育ガバナスコース全体で行われた。筆者の研究室の 4 年生は、発表 10 分、質疑 4 分であった。また、発表者全員、A4 サイズ 2 枚程度の発表用のレジメを作成した。

3. 4. 3. 2020 年度後期

2020 年度後期からは学部 4 年生 6 名、研究生 1 名、大学院生 1 名、合計 8 名を対象に行われた。その詳細は次の通りである。

3.3 で述べた「指導方略」3 点に基づいて行われた。週 1 回のペースで、1 コマ 90 分間、「対面と遠隔を組み合わせた」「リアルタイム形式」で実施した。よって、対面参加と遠隔参加が共存する形で行われた。まず、対面参加者は大学の指定する教室へ出向き、遠隔参加者は自宅等から Teams（オンライン会議）にて参加する。筆者（教員）は対面参加者がいる大学の教室に毎回出向いて行った。すなわち、大学にて、教員 1 名（筆者）と対面参加者が教室にいる一方で、自宅等から遠隔で参加する学生は Teams でつなぐという形式となる。

「対面参加」「遠隔参加」どちらにするのかは、学生自身が自由に選択できるようにした。すなわち、第 1 回目が対面、第 2 回目は遠隔、などのように学生自身が、各自、学ぶ内容や予定に応じて、自由に設定できるようにした。さらに、対面・遠隔のどちらを選択するのかは前日までに教員へ必ず連絡することとした。

なお、各学生は、少なくとも 2 週間に 1 回の割合で、各自、発表を行うこととし、卒論等の進捗状況の報告等をした。各学生は、A4 サイズ 1 枚以上で、「報告書」を書いて、各自の発表の前日までに必ず提出する。提出先は、moodle 上の「提出物を UP するフォーラム」である。

3. 4. 4. 2020 年度卒論発表会

2 月 17 日（水）午後、卒論発表会が行われた。発表 10 分、質疑 4 分であり、発表者は、卒論発表会用レジメ（A4 サイズ、2 ページ）を作成する。

4. 結果と考察

4. 1. 対面と遠隔を組み合わせたリアルタイム形式について

上述したように、「対面参加」か「遠隔参加」かを学生自身が自由に選択できるようにした。さらに、受講生は、各自、対面・遠隔のどちらを選択するのかを前日までに教員へ必ず連絡するようにした。その結果、期間中、連絡漏れは 1 件もなく、教員サイドで前日までに、受講生全員の参加形態が確認できた。対面と遠隔が共存するリアルタイム形式の授業環境下では、受講者全員の参加形態（対面なのか、遠隔なのか）を事前にすべて把握できるのは、同時双方向にてリアルタイムで授業等を進めていく上で、とても有益なものとなった。

次に、11月から12月までの2ヶ月間について、「対面」を選択した割合を集計した（図1）。

4年生 : S1 (50%)、S2 (50%) S3 (50%)、S4 (75%)、S5 (100%)、S6 (25%)
大学院生 : D (100%)
研究生 : R (100%)

図1 各学生が対面参加を選択した割合
()内の百分率は、対面参加を選択した割合

図1について、S1～S6は学部4年生6名であり、Dは大学院生、Rは研究生である。図1の()内の百分率は、対面参加を選択した割合である。例えば、4年生のS4 (75%)とは、11～12月の2ヶ月間で、S4の「対面参加」は75%であることを意味する。よって、S4の「遠隔参加」は25%であったことになる。

S5、D、Rは、対面参加100%であった。D、Rは大学近隣に下宿している、S5は遠隔参加がやや難しい、という状況であった。ネット環境が不安定、自宅等で同居人への配慮が必要な場合などについては、遠隔授業実施時には大学からの積極的なサポートが必要であるといえる。

また、S2とS3は、データ分析手法に共通する部分があるため、2人は同じタイミングに合わせて「対面参加」を選択している。これにより、S2、S3、教員の3者で、より効果的な対面指導が実現できたといえる。さらに、研究の方針や詳細な分析手法の打合せを行う際には、学生自らが対面を選択し、S2、S3、教員の3者で議論を進めた。また、S6は、卒論本文（原案）完成後に、添削結果の個別指導時に「対面参加」をした。これは対面参加の多寡ではなく、効果的なタイミングで「対面参加」を選択することが重要であると示唆される。

このように、各学生は、各自の事情に合わせて、主体的に「対面」「遠隔」を選択して、参加しているといえる。特に、交通アクセスが悪い本学においては、「遠隔参加」のメリットも否定できない。

今日、リモートワークや在宅勤務が推進される中、大学時代に自ら「対面」「遠隔」をうまく組み合わせたリアルタイム型の学びを経験することで、卒業後には、「出勤」「在宅」を適切に選択して効果的に働くことにつながることを期待できる。

4. 2. 卒論テーマについて

筆者の研究室が行っている主な研究テーマは以下の(1)～(3)に分類できる（図2）。

- (1)授業実践研究
- (2)システム開発研究（教材開発研究）
- (3)調査研究・実験系研究、(3-1) 社会・教育調査、(3-2) 心理学実験

図2 卒業研究の3つの分類

図2の分類に基づいて、2020年度の筆者の研究室に所属する4年生6名の卒論タイトルを分類した結果を図3に示した。

図2の分類(1)(2):

①インストラクショナルデザイン (ID) を取り入れた ICT 活用に関する授業デザインの効果と検証

図2の分類 (3) :

②テキストマイニングによる宮野真守の歌詞分析

③映画予告編への視聴者の関心の分析 - Youtube のコメントから -

④動画共有サイトへの依存傾向による効用・利用スタイルの比較に関する研究

⑤大学生を対象としたスマートフォン向けアプリゲームの依存傾向とゲームカテゴリとの関連性

⑥大会から見る e スポーツの現状と将来性

図3 筆者の研究室に所属する4年生6名の卒論タイトル一覧 (2020年度)

図3に示したように、2020年度、筆者の研究室の4年生6名の卒業研究の内訳は、教材開発および授業実践研究が1件(図3の①)、テキストマイニング(歌詞やSNSなどの膨大なテキストデータの分析)が2件(図3の②~③)、メディア・社会と人間とのかかわりに関する調査研究が3件(図3の④~⑥)であった。

5. まとめ

本稿では、学部4年生6名、大学院生1名、研究生1名を対象に、「論文執筆」を目的とした「対面と遠隔を組み合わせた」「リアルタイム型」「少人数・個別学習指導」について報告した。「対面参加」「遠隔参加」については学生自身が自由に選択できるものとし、前日までに「対面」「遠隔」どちらで参加するのかを必ず教員に連絡するようにした。これにより、教員は受講生の一人一人が「対面なのか」「遠隔なのか」を事前に確認できるというのは、リアルタイム形式で同時双方向にて指導を行う上で、とても大きなメリットがあった。毎週「対面参加」、隔週での「対面」「遠隔」参加、重要なポイントでは必ず「対面参加」など、各学生は、個々人の事情や進捗状況に合わせて、対面と遠隔をうまく選択して論文執筆をしている様子が分かった。教育ガバナンスの第1期生であり、優秀で勤勉な4年生の皆さん、院生・研究生の皆さんと一緒に学べたことは大変有意義であった。3月に卒業される4年生の皆さんは、第1期生として今後の活躍に大いに期待している。

本稿で用いた方略が多数の通常授業に応用できるわけではないので、今後は、多数での対応について、さらなる検討が必要である。この点が残された今後の課題である。

謝辞

研究室引越に伴い、研究設備等を全くのゼロの状態から新規に整備する必要があった。そんな中、江島徹郎教授をはじめ多くの皆様より、研究室の整備に多大なるご支援を頂きましたことを感謝の意を持って付記します。

参考文献

[1] 野崎浩成 (印刷中) 大学での卒論・修論指導時における「問い」の役割、『「問う力」を育て

- る理論と実践－問い・質問・発問の活用の仕方を探る』、第9章、pp.167-186、ひつじ書房（東京）
- [2] 野崎浩成（2015）自己調整学習を促す e-learning 環境、日本リメディアル教育研究、10（1）、58-59、日本リメディアル教育学会
- [3] 文部科学省（2020）大学等における新型コロナウイルス感染症への対応状況について
<https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_koutou01-000009971_14.pdf>2021.1.26
- [4] 文部科学省（2020）今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議（第5回）令和2年9月24日（木）資料2-1
<https://www.mext.go.jp/content/20200924-mxt_keikaku-000010097_3.pdf>2021.1.26

付録

以下の通り、テンプレート（簡易版）の一部を掲載した。

卒論テーマ：○○○○○○○○○

1. はじめに

なぜ、そのテーマに取り組むのか

- ・社会的ニーズ
- ・教育的ニーズ
- ・学問的ニーズ

2. 先行研究の概要

これまでの研究で、何がどこまで明らかになったのか。

先行研究の問題点は何か。

=> 以上の点を踏まえて、卒論で何をするのか？

これまでの先行研究の不備な点や不足している点を卒論で取り組む。

3. 研究計画

誰（何）を対象に、いつまで、何をするのか？、

期待される成果は？、先行研究と比べて新しい点は何か？、など。

具体的に書きましょう。

4. 引用文献

- ・今まで読んだ文献のリスト
 - ・これから読んでみたい文献のリスト
-